

## 北セレベス（スラウェシ）の初期 ムハマディヤ運動に関する覚え書

利 光 正 文

### はじめに

インドネシアにおけるムハマディヤの研究の第一人者アルフィアンの近著『ムハマディヤ—オランダ植民地政策の下でのムスリム近代主義者組織の政治行為<sup>①</sup>』を見ると、創立以来のムハマディヤの歴史が実証的に描き出されている。特に、ジャワとミナンカバウでのムハマディヤ運動に関する詳細な研究は、まさに見事の一言に尽きる。すでに、ピーコックや中村光男の研究により<sup>②</sup>、ムハマディヤ発祥の地ジャワでの運動の起こりと発展およびその理念が精緻に解明されてきた。ミナンカバウのムハマディヤについても、ハムカやタウフィック・アブドゥルラの研究<sup>③</sup>がある。南スラウェシ（セレベス）のムハマディヤ運動に関する研究がマトウラダを初めとしていくつか出てきた<sup>④</sup>。ムハマディヤ研究の最近における進展ぶりは、まさに目を見張らせるものがある。しかしながら、インドネシアは多くの島々から成る島嶼国家であり、ムハマディヤの支部はインドネシアの全域に広がっているため、主要な島々のムハマディヤ支部についての究明、すなわち地方支部研究が中央本部の研究と並行して進められる必要がある。

さて、小稿で取り扱われる北スラウェシは、ムハマディヤ運動の中ではかなり重要な地域である。なぜなら、その中心地であるゴロンタロは、アルフィアンが「ムハマディヤが拡大に成功し、ムスリムが集中して居住する地」<sup>⑤</sup>と述べているように、ムハマディヤ支部の中では優等生の部類に属する地と言えるからである。しかし、北スラウェシのムハマディヤに関する研究は極めて限られている。イブラヒム・ポロンタロの研究<sup>⑥</sup>が唯一と言っても過言ではない。限定された材料により、何かを解明しようと言う

のは至難の技であるが、将来における体系的な研究の第一歩として、ムハマディヤ・ゴロンタロ支部成立前後の事情について考察してみたい。

## 1. ゴロンタロのムハマディヤ支部成立前史

北スラウェシの中心都市はメナドである。メナドは地理的にフィリピンと近く、スペイン人によるミナハサ族への宣教活動が盛んに行われ、キリスト教が定着した。メナド(ミナハサ族)のキリスト教徒は90%に達すると言われる<sup>⑦</sup>。1930年当時のメナド市の人口構成は、次のとおりであった。残念ながらゴロンタロ市の人口が分からないけれども、1961年のインドネシア中央政府統計局の人口センサスによると、マナド(メナド)市129,912人

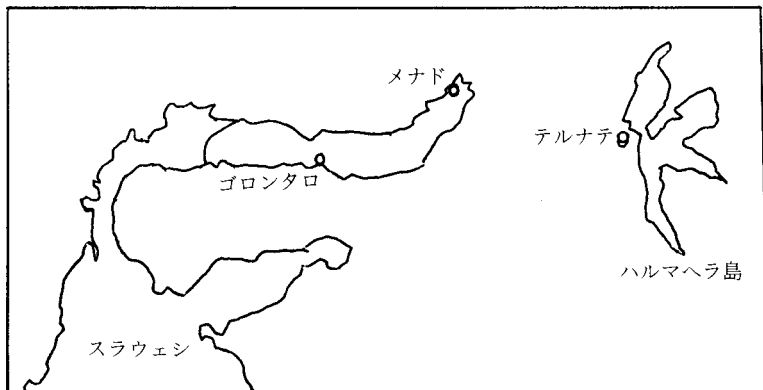


図1. 北スラウェシ (セレベス) (現在)

表1. メナド市の人口構成 (1930年)

ヨーロッパ人	原住民 (インドネシア人)	中国人	その他の外国人	合計
1,444	20,080	5,375	585	27,482

出典) Dutch East Indies. Centraal Kantoor voor de Stastiek : Indisch verslag. Netherlands Indian report, 1931-1941, P. 22.

に対しゴロンタロ市 71,378 人で約 5 割強の比率である<sup>⑧</sup>。単純に比定はできないが、ある程度の目安にはなると思う。メナド市の人口も 30 年間で 4.7 倍に増加している。

さて、ゴロンタロ市へのイスラームの伝来はテルナテ王国のイスラーム化と大いに関係がある。テルナテにイスラームが伝来するのが 15 世紀後半とされており<sup>⑨</sup>、イスラーム化により強化となったテルナテのスルタンがゴロンタロへもその支配権を及ぼすようになるので、ゴロンタロへのイスラームの伝播は 16 世紀前半くらいであろう。キリスト教徒の地メナドに対して、ゴロンタロは北セレベスのイスラームのセンターとなる。加えて、南セレベスのマカッサル・ブギス族は古来より海洋民として有名であり、海上交易を業としていた。そして彼らは熱心なイスラーム教徒となっていた。北セレベスのイスラーム教の中心地ゴロンタロとセレベスの中心マカッサルとは海上貿易を通しての緊密な交渉があったものと思われる。スラウェシは陸路による交通は非常に困難を極めるが、海上交通はいともたやすく往来する。

次に、ムハマディヤ・ゴロンタロ支部成立までの経過をみてみたい。1912 年、キャイ・ハジ・アフマド・ダフランによってジョクジャカルタ（中部ジャワ）でイスラームの改革団体ムハマディアが設立された。続く 17 年、下部団体として婦人組織アイシヤ（Aisjijah）とボーイ・スカウト組織ヒツブル・ワタン（Hizbul Wathan）が誕生した。スエズ運河の開通（1869 年）により、インドネシア人ムスリムのメッカ巡礼は急増し、当地やエジプトに留まって勉強する若者も多数いた。ミナンカバウ人は進取の気象に富んでおり、教育ランタウ（外界への出向）する青年達も多く、西アジアやエジプトで浸透していたイスラーム改革思想を摂取して帰国する傾向が強かった。この動きは、やがてパドリ戦争へと収斂されてゆくが、30 年にもわたって戦われたこの反オランダ闘争は、その残した傷痕も深く、その後のイスラーム改革運動のイニシアティヴをジャワ人に譲り渡す結果となった。1926 年のムハマディヤ・パダンパンジャン支部の成立は、イスラーム改革運動のジャワからの逆輸入と言えるかもしれない。1912 年に設立されたムハマディヤは、20 年代になるとジャワ以外のいわゆる外領にその支部を拡大し

てゆくことになる。

残念なことに、イスラーム化以後のゴロンタロの詳細な歴史は分からない<sup>⑩</sup>。時代は20世紀にとんでしまう。これ以後の記述はその大半をイブラヒム・ポロンタロの『ゴタンタロの半世紀ムハマディヤ発展史』に拠って進めてゆく。ジョクジャカルタでムハマディヤが設立されたと同じ時(1912年)、ゴロンタロでもシラジュッディン・オリイ (Siradjudin Olii) によってイスラームの勉強グループ、ディヌル・イスラミヤ (Dinul Islamiyah) が組織された。17年にはイスラーム同盟の委員長チョクロアミノトが同盟の宣伝と細胞組織を作るためゴロンタロを訪問した。しかし、結局は同盟の組織作りは成らなかったようである。1927年、ムハマッド・サイド (H. Muhammad Said), ウスマン (J. Usman), ボウェ・ナサル (Bouwe Nasaru), ヒネロ (A. Hinele) らが中心となってタブリフル・イスラーム (Tablighul Islam) を結成した。この組織はコーランとハディースに基づいてイスラームの正しい教えを広め実践するというもので、イスラーム改革運動の実践団体となった。この組織がムハマディヤ支部の原細胞である。1929年、ジョクジャカルタのグヌン・サリ・イスラーム師範学校 (Guru Kweekschool Gunung Sari) を卒業したユスフ・オトルワ (Jusuf Otoluwa) が、ゴロンタロへ帰って来た。彼はジョクジャカルタでムハマディヤ運動を身を持って経験していた。オトルワはイスラーム勉強会ジャマア・ブンガジアン・イスラーム (Jamaah Pengajian Islam) を主宰するとともに、タブリフル・イスラームの幹部となった<sup>⑪</sup>。

ところで、ゴロンタロにおける教育の発達はどうであろうか。20世紀初頭のオランダの倫理政策開始以来、インドネシア各地に植民地政府による学校が設立されるとともに、私立学校も続々登場した。ゴロンタロでは1922年イナ・ダタウ・オリイ (Ina Datau Oli I) によって女子学校 (Sekolah Nona) が創立されたのを手はじめに、25年にはレクソスミトロ (Reksosumitro) がウナウナ (Una-Una) のイスラーム同盟によって建てられたオランダ・インドシア人学校 (Hollandsch Inlandsch School) をゴロンタロへ移し、27年にはカレル・ポナモン (Karel Pnamon) がオランダ・インドネシア人コーラン学校 (HIS Met de Qoran) を設立するとともに、29年にはスルヨ・

クスモ（Suryo Kusumo）が HIS の上級学校レクソ・スルヨ（Rekso-Suryo）研究所を作った<sup>⑩</sup>。このような時、ジョクジャカルタのムハマディヤ学校で学んだユスフ・オトルワがゴロンタロへ戻ってきたのであった。学校教育を受けた若者たちがイスラーム改革運動に傾倒し始めるのは、自然の成り行きであった。

## 2. ゴロンタロ支部設立

ムハマディヤ支部を作る場合、その地にあるイスラームの小組織あるいはジョクジャカルタのムハマディヤ本部どちらかの働きかけにより互いに連絡を取り合い、中央本部より代表が出向いて指導を行って、機が熟した時を見計らってムハマディヤ支部として承認するという場合が多いようである。ゴロンタロのケースではタプリフル・イスラームが組織されており、ムハマディヤ学校で学んだユスフ・オトルワがその幹部となることにより、支部創立に向けての歩みが始まる。1929年、ムハマディヤ設立委員会が結成された。委員会を構成するメンバーは、ユスフ・オトルワ、ムハマッド・サイド（H. Muhammad Said）、アフマッド・ブジ（Ahmad Budji）、トム・オリイ（Tom Ollil）、フセイン・アカセ（Husain Akase）、ウティナ・ブルアティ（Utina H. Buluati）、ウマル・バサラマ（Umar Basalama）、アブドゥルラ・フォン・グレイ（Abdullah Von Grey）、ボウェ・ナサル（Bouwe Nasaru）、ムフシン・モハマッド（Muhsin Mohamad）の面々であった。このうち、トム・オリイは北スラウェシのムハマディヤ・リーダーとして、長くその職に留まる。フォン・グレイはオランダ人のハジとして名を知られていた<sup>⑪</sup>。南スラウェシのマカッサルでは1926年に支部が設立されており、数年間で他地域にも支部が拡大し、ムハマディヤ運動の強固なとりでの1つとなる。南スラウェシからの様々な働きかけがあったものと想像されるが、ここではそれについて触れる余裕がない。

上記委員会の活動を経て、1929年9月8日、ムハマディヤ・ゴロンタロ支部の発会式がフォルトゥナ映画館（Fortuna Bioskop）で持たれた。発会式への来賓は、ムハマディヤ中央本部書記長モハマッド・ユヌス・アニス

表2. Bestuur Cabang Muhammadiyah Gorontalo (ゴロンタロ支部役員) (1929年)

Ketua(委員長)	: Tom Olii
Wakil Ketua(副々)	: Jusuf Otoluwa
Sekretaris(書記)	: Mohamad Dunggio
Bendahara(会計)	: Muhsin Mohamad
Commisaris(委員)	: 1. Haji Jusuf Abas 2. Umar Basalama 3. Husain Akase 4. Murasyid Mohi 5. J. Kamaru 6. Djufri Mohamad 7. Marl Baladrab

出典) Ibrahim Polontalo, Sejarah Perkembangan Muhammadiyah Setengah Abad Di Gorontalo, P. 15.

(Mohammad Junus Anis),  
ゴロンタロ警察署長ファン・ダム (Van Dam), ゴロンタロ政庁官吏アブデイ・イラフデ (Abdi Ilahude) であった。この時、ムハマディヤ・ゴロンタロ支部の正式化 (本部承認) 請願が採択された。ゴロンタロが支部として認められたのは29年の12月9日のことであった。中央本部の機関誌 *Sowera Moehammadija*

(ムハマディヤの声)によると、ゴロンタロ支部成立後約1年と数カ月間の会員は143名、その内訳は支部やそれぞれの部門の役員が37名、一般会員106名となっていた。さらにその間22回の集会を持ち、手紙は53通を出し39通が寄せられ、ゴロンタロ市外へは5回の宣伝活動と14回のタブライ (Tabligh 伝道) を行った。加えて、オランダ・インドネシア人コーラン学校と宗教学校ブスタヌル・アトファル (Boestanoel 'athfal) を運営するために二軒の家を借り、普通教科と宗教科目のための4人の教師を抱え、43人のオランダ・インドネシア人コーラン学校生徒 (男女共学) と37人の宗教学校生徒 (男のみ) がいた<sup>14)</sup>。このムハマディヤ学校については副委員長のオトルワが責任者となり、その運営に携わった。

さて、ゴロンタロの支部会議は第1回が1932年に開かれている。この年はマカッサルで第21回ムハマディヤ全国大会 (5月1-7日) が開催されており、ゴロンタロ支部は代表として副委員長オトルワと書記モハマッド・ドゥンギオを派遣した<sup>15)</sup>。この時、同じセレベスの一員として、ゴロンタロ支部がマカッサル支部にいかほどの支援を与えたか定かではないけれども、反対にゴロンタロがこの大会から大きな刺激を受けたであろうことは

北セレベス（スラウェシ）の初期ムハマディヤ運動に関する覚え書

察して余りある。このことが後年の北セレベス全権委員会設置へと続く。第2回ゴロンタロ支部会議は翌33年に開かれ、34年には第3回会議が催された。この第3回会議でMajlis Perwakilan Pengurus Besar Muhammadiyah Daerah Keresidenan Manado atau Daerah Sulawesi Utara（メナド理事州および北スラウェシ地区ムハマディヤ代表会議）が設けられ、やがてそれは北セレベス全権委員会の成立となって結実する。この時点での北セレベスとは、現在の行政区画でいう中部スラウェシもその中に含んでいる。全権委員会のメンバーは次のとおりである。この表を見るとメナドを初めと

表3. Konsulat Muhammadiyah (ムハマディヤ全権委員会) (1934年)

Ketua	: Tom Olih
Wakil Ketua	: Iduna Baga
Sekretaris I	: Djafar Mokie
Sekretaris II	: Kadudu Dunggu
Bendahara	: Asikin Datau
Commisaria	: Djibong (Luwuk 支部)
	: Jusuf Harisah (Manado 支部)
	: Mohamad Toha (Donggala 支部)
	: Unta Mokodongan (Kotamobagu 支部)

出典) Ibrahim Polontalo, op. cit., P. 19.

して、北スラウェシではいくつかの支部が成立していることが分かる。勿論、全権委員会の本部はゴロンタロに置かれた。尚、第3回会議にはムハマディヤ中央本部副委員長ムフタル(K. H. Muchtar)

とその妻およびアイシヤ中央本部代表バディラー・ツビル (Sitti Badilah Zubir), ムハマディヤ青年部 (Pemuda Muhammadiyah) の代表アスディ・ナルジョ (Asdi Nardjo), さらにゴロンタロ政庁の役人達が来賓として出席した<sup>16)</sup>。

### 3. 支部活動

タブライについてももう少し詳しく見ると、

「1931年2月19・20日の夜、ムハマディヤ学校でタブライ集会在が持たれた。約150人の男女が集まり、ブルアティ (H. Boeloeti) がコーランとハディース (伝承) の解釈について説明した。そして集会の中で、6カ月

前からイスラームに改宗し、ムハマディヤの会員となったミナハサ人の元クリスチャン、キンダンギア (A. Kindangia) が紹介された<sup>⑩</sup>。」

「断食明けの祭り (Lebaran) にはトム・オリィ、ラマドラウ (sitti M. Lamadlaw), キルディアト (S. Kirdiat) らムハマディヤ幹部が出席した集会が持たれ、レバランの意義とコーランとハディースの意味、そして神アラーによってムスリムに課せられた義務等についての演説をトム・オリィが行った<sup>⑪</sup>。」

と「スアラ・ムハマディヤ」に記されている。さらにこの機関誌によると、ザカート・フィトラ (zakat fitrah 断食明けの供米) に 50 名程の貧しい男女が集まり喜捨をうけ、イスラームでは禁じられているトゥアク (toeak ヤシ酒) 売りがモスクにやって来て安売りし、貧しい人たちが競って買い、それを飲むと報告している<sup>⑫</sup>。どうも、イスラーム最大の祭りレバランの時は無礼講のようである。この時ばかりはムハマディヤの面々も大目に見るのかもしれない。しかし、フトバ (choetbah 説教) は積極的に行い、アラビア語とその土地の言葉でイスラームに関する知識を正しく教え込もうとしたことがうかがえる。

次に、出版活動へ目を転じよう。ムハマディヤはイスラームの正しい理解を普及させるため出版活動に力を入れる。1922 年にタマン・プスタカ (Taman Poestaka 図書館) 部門を設けイスラーム関係の書物とムハマディヤで発行した出版物を収蔵していく。ちなみに、1924 年の「スアラ・ムハマディヤ」ではタマン・プスタカを特集している。

20 世紀の初頭、インドネシア各地で新聞及び雑誌がまさに「雨後の筍」の如く発行された。それは、インドネシアの民族主義運動の勃興と軌を一にしており、インドネシア史上、啓蒙と覚醒の時代といえるかもしれない。オランダ語の新聞もあるがインドネシア語のものが圧倒的に多く、Bahasa Melayu (ムラユ語) がインドネシア人の共通語としての市民権を得てゆく過程がよく分かる。ジャカルタの国立図書館が収蔵している 1810 年から 1984 年までに発行された新聞のカタログ<sup>⑬</sup>を見ると、メナドでは 1920 年から 40 年の 20 年間で実に 26 種もの新聞が発行されていた。

このうち『アル・イマーム』は月刊誌でトム・オリィが編集長を務めた。



表4. ゴロンタロで発行された新聞（1920—1940）

新聞名	発行年	言語
PERSAUDARA'AN	1926—1927	インドネシア語
OETOESAN Islam	1927	インドネシア語
DE JEUGD	1932	オランダ語
AI-IMAM	1932—1933	インドネシア語
KEWADJIBAN Kita	1934	インドネシア語
PERINGATAN	1934	インドネシア語

出典) KATALOG SURAT KABAR : Koleksi Perpustakaan Nasional 1810—1984.

さらにゴロンタロ支部ではフセイン・アカセが責任者となり、Jaarverslag (年報) を発行し、ムハマディヤ会員に販売するとともに、一般人へも購読を呼びかけた。

教育活動については前章とやや重複するが、ゴロンタロの学校だけでは限界があり、メナドの近くトンダノのミュロ学校 (Mulo Tondano) やマカッサルの標準学校 (Normaal School Makasar), あるいはアンボンの師範学校で教育を受け、ゴロンタロに帰ってきた。

ところで、1934年までに北スラウェシではペタ・サンギル・タラウド (Peta Sangir Talaud), メナド, アムラン・ミナハサ (Amurang Minahasa), コタモバグ (Kotamobagu), ゴロンタロ, ドンガラ, ルウク (Luwuk) と7つのムハマディヤ支部が誕生し、この年トム・オリイがコンスル (konsul 全権代理) に就任、1956年までその地位にあった。

#### 4. アイシヤ (Aisijjah) の活動

アイシヤはムハマディヤの婦人組織として、1917年にアフマド・ダフランによって設立され、現在に到っている。この組織はムスリム女性の啓蒙、特にイスラームへの正しい理解を呼びかける伝道活動に力を入れるとともに、女子教育のためアイシヤ学校を設立、イスラーム教育科目だけでなく西欧の近代普通科目も教授することにより、近代世界に適応可能なムスリム・インテリ女性の養成を目標としている。さらに、病院 (産婦人科) や診療所、孤児院や救済院等の経営による社会福祉活動にも力を入れている。この団体はムハマディヤの下部組織でありながらも、半ば独立した団体とし

て、そのシステムや活動は別個のものである。機関誌「スアラ・アイシャ」は1926年に創刊され、「スアラ・ムハマディヤ」と比べても全く遜色なく、ムスリム女性のための重要な啓蒙雑誌となっており、インドネシアの女性運動史を解明するための貴重な史料ともなっている。

創立時のアイシャ委員長はシティ・バリア (Sitti Bariah) が務めていたが、1923年からダフランの妻ニヤイ・ダフラン (Njai Dachlan) にバトンタッチし、以後、ニヤイ・ダフランは名実ともにアイシャの象徴となり、ムスリム女性の啓蒙と社会福祉活動に全身全霊を捧げた。現在、彼女はインドネシアの民族独立英雄の一人とされており、ムスリム女性の尊敬を集めている<sup>21)</sup>。

ここで、ゴロンタロにおけるアイシャの活動について見てみよう。この地のアイシャ支部は1930年4月12日に設立された。それに先立ち、ゴロンタロではワル・アシュリ (Wal-Ashri)、アズ・ザキラ (Adz dzakirat)、シスウォ・プロジョ (Siswo-Projo) と言ったムスリムの女性による小規模なイスラーム勉強会が作られており、タブライや女子教育に向けての準備がなされていた。そして、このような個々の活動がアイシャの支部として一つにまとまって組織化されたのである。その統一集会には60名前後のゴロンタロの女性が参集し、1930年4月12日、アイシャ・ゴロンタロ支部は誕生した<sup>22)</sup>。幹部会メンバーは以下の如くである。そして、同年9月7日、ゴロンタロのアイシャ学校 (sekolah Aisjijah) が開かれた。開校式には約60名

**アイシャ・ゴロンタロ支部役員(1930年)**

Ketua(委員長)	: Marie Lamadilawo
Wakil Ketua(副々)	: Marie Dambea
Sekretaris(書記)	: Marie Suleman
Bendahara(会計)	: Zubaedah Dunga
Commisaris(委員)	: Zenab Sabu Hadidjah Husa Saripah Baga Hawa Olii Ida Dunda

のアイシャ会員はもちろん、多くの人々が出席し、来賓として、ゴロンタロ政庁の役人、報道機関の代表、政庁官吏組合の代表、他学校の教師等が招かれた。そして、この学校について「スアラ・アイシャ」は次の様に報じている。

出典) Ibrahim Polontalo, op.cit., P. 20.

「この学校はわれわれに、将来、ゴロンタロの女性がいかにして発展するか、あるいは身心の発達のためにいかに科学を实践するかということに関して、希望と確信を与えるのである。1930年9月7日のこの学校の開校は、金色のインクでもってゴロンタロの歴史の中に書き加えられなければならない。

当校には“Boestanoel Atfal（暗誦の園）、という名が冠せられた。願わくばこの学校に全能の神の御加護と人々の物心両面の援助があらんことを。そして、学校の設立が成功裡に終わることを願ってやまない<sup>23</sup>。」

このようにして、アイシヤ支部の活動は学校教育から始められた。こうした教育のため、ジャワから特別に教師が招聘された。最初は1931年にアブドゥル・ラウフ（Abdur Rauf）、33年にラデン・ヒمام（Raden Himam）とアブドゥル・ハヤト（Abdul Hayat）の3名である<sup>24</sup>。上記の講師たちはアイシヤ学校だけでなく、ムハマディヤが関係する学校で教鞭を執ったようであるが、それにしても、アイシヤなかんずくムハマディヤの教育活動にかける熱意がひしひしと伝わって来る。

尚、アイシヤとともにボーイ・スカウト組織ヒツブル・ワタン（Hizboel Wathan）も活動しているが、ここでは触れる余裕がないので、後に稿を改めて取り扱いたい。

## おわりに

1940年に開かれた第9回北セレベス区ムハマディヤ会議は、北セレベスのムハマディヤ創立10周年記念という節目の時期で、盛大に行われた。北セレベス地区の支部は40年時点で7つになっていた。ペタ・シンギル・タラウド（Peta Sangir Talaud 3グループ）、メナド（Menado 4グループ）、アムラン（Amurang 1グループ）、コタモバグ（Kotamobagu 3グループ）、ドンガラ（Donggala 4グループ）、ルウク（Luwuk 6グループ）、ゴロンタロ（20グループ）である。地図上の位置は左のとおり。ただし、ペタ・シンギル・タラウドは比定できなかった。この会議は4月23日から30日までの一週間開催され、ジョクジャの中央本部から副委員長のユヌス・アニス（Junus Anies）を

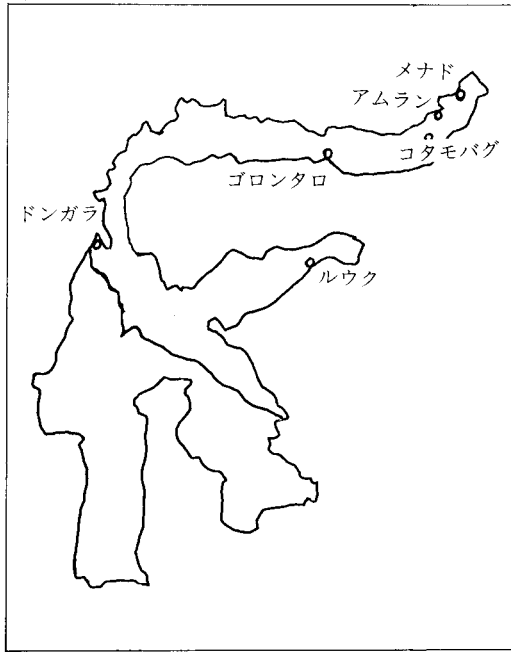


図2. 北セレベスのムハマディヤ支部 (1940年)

初めとする、政庁役人や報道機関の代表等多数の来賓を招いて実施された。それは北セレベスのムハマディヤ運動にとっての一大イベントであり、イスラーム改革運動が軌道に乗った証しでもあった。南セレベスにははるかに及ばないけれども、北セレベスのムハマディヤはゴロンタロを中心として確実な歩みを続けていた。

以上、極めて大雑把に北セレベスのムハマディヤ運動について、ゴロンタロに焦点を定めながら

考察してきた。メナドも大切ではあるが記述する余裕がなかったので、今後の課題としたい。ともあれ、ムハマディヤの主要な支部を見てゆくことがこれからのムハマディヤ研究のメイン・テーマとなると思われるので、現地史料にあたりながら、少しずつこの点の解明をしてゆきたいと思う。

(註)

- ① Alfian, MUHAMMADIYAH : The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism, Gadjah Mada University Press, 1989.
- ② James L. Peacock, Purifying The Faith : THE MUHAMMADIYAH MOVEMENT IN INDONESIAN ISLAM, The Benjamin Cummings Publishing Company, California, 1978

- Mitsuo Nakamura, *The Cressent Arises Over The Banyan Tree*, Gadjah Mada University Press, 1983.
- ③ HAMKA, MUHAMMADIYAH di MINANGKABAU, Yayasan Nurul Isiam (PANJI MASYARAKAT), Jakarta, 1975.  
Taufik Abdullah, *SCHOOLS AND POLITICS : THE KAUM MUDA MOVEMENT IN WEST SUMATRA (1927-1933)*, Modern Indonesian Project Southeast Asia Program Cornell University, Ithaca, New York, 1971.
- ④ マトゥラダ「南スラウェシのイスラム」(タウフィック・アブドゥルラ編 白石さや・白石隆 訳『インドネシアのイスラム』株式会社めこん, 1985年)  
拙稿「南スラウェシ(セレベス)のイスラム改革運動研究(その1)ームハマディヤ・マカッサル支部設立に関する覚え書ー」『史学論叢』第18号, 昭和63年。  
拙稿「南スラウェシ(セレベス)のイスラム改革運動研究(その2)ー第二一回ムハマディヤ・マカッサル大会を中心としてー」『史学論叢』第19号, 平成元年。
- ⑤ Alfian, *op. cit.*, P. 290.
- ⑥ Ibrahim Polontaro, *Sejarah Perkembangan Muhammadiyah Setengah Abad Di Gorontalo*, Pimpinan Muhammadiyah Wilayah Sulawesi Utara, 1981.
- ⑦ クンチャラニングラット編 加藤剛・土屋健治・白石隆 訳『インドネシアの諸民族と文化』株式会社めこん, 1980年, P. 198.
- ⑧ 同上書, P. 185.
- ⑨ トメ・ピレス『東方諸国記』大航海時代叢書V, 岩波書店, 1978年, P.358.  
Yusufu Abdullah Puar, *Masuknya Islam ke Indonesia*, Indradjaya Jakarta-Bandung, 1981, P. 134.
- ⑩ Liputo M., *Sedjarah Gorontalo (Gorontalo: Pertjetakan Rakjat, 195-?)* は未入手。
- ⑪ Ibrahim Polontalo, *op. cit.*, P. 12.
- ⑫ *Ibid.*, P. 13.
- ⑬ *Ibid.*, P. 14.
- ⑭ Soeara Moehammadijah, 1931, P. 782.
- ⑮ PERINGATAN CONGRES MOEHAMMADIYAH ke XXI, Hoofdbestuur

Moehammadijah, 1932, P. 26.

- ⑩ Ibrahim Polontalo, op. cit., P. 18.
- ⑪ Soeara Moehammadijah, 1931, P. 685.
- ⑫ Ibid., P. 686.
- ⑬ Ibid., P. 686.
- ⑭ KATALOG SURAT KABAR : Koleksi Perpustakaan Nasional 1810—1984, Perpustakaan Nasional, Jakarta, 1984.
- ⑮ ニヤイ・ダフランについては SURATMIN, Nyai AHMAD DAHLAN, Departmen Pendidikan Dan Kebudayaan Direktorat Sejarah Dan Nilai Tradisional Proyek Inventarisasi Dan Dokumentasi Sejarah Nasional, 1981/1982.に詳しい。
- ⑯ SOEARA AISJIJAH, 1930, P. 224.
- ⑰ Ibid., PP.227—228.
- ⑱ Ibrahim Polontalo, op. cit., P. 76.